

# スプラウトにおける対外政策研究の再検討の試み(1)

—その国際政治学の理論体系に注目して—

赤 坂 一 念

## 問題の所在

1. スプラウト国際政治学の思想的背景
  - (1)人間観
  - (2)国家観
  - (3)政治観
  - (4)国際政治観
2. スプラウト国際政治学の方法論的模索
  - (1)分析志向的アプローチ
  - (2)学際的アプローチ
  - (3)「決定論的思考」批判
  - (4)「中範囲理論」の模索
3. スプラウト国際政治学の理論的枠組み
  - (1)「エコロジカル・パースペクティブ」
  - (2)「エコロジカル・パラダイム」
  - (3)「対外政策分析」と「ケイパビリティ分析」

おわりに

## 問題の所在

アメリカ国際理論研究におけるパワー概念は、1930年代から40年代にかけて本格的に覚醒・受容されたものの、その取り扱いは、アメリカの伝統的なパワー・ポリティクスに対する嫌悪感・蔑視から、それは軍事力と同一視されがちであった。またこうしたパワーを「悪」とみなす伝統的イメージは、パワーの軍事的な意味合いを強調するアメリカにおける一般的傾向のみならず、例えば、科学主義的アプローチに見られるように、パワー概念をできるだけ非政治的に変数として取り扱おうとする学問的傾向にも存在している<sup>1)</sup>。

このような時代背景と学問的傾向の中で、当時のアメリカ人研究者としては極めて特異的な存在といえるが、本稿で取り上げるスプラウト(Harold Sprout & Margaret Sprout)で

ある。スプラウトは、国際政治を分析する上でのパワー概念の有意性にいち早く覚醒し、パワー概念を肯定的に自己の理論的枠組みの中に取り入れることを試みた研究者のひとりとして注目すべき存在である。

筆者は、かねてより、1930年代から70年代にかけてのスプラウトによる一連の著作を、とりわけ、アメリカ国際理論研究におけるパワー論争の文脈のなかでフォローしてきたが、その考察の過程で、パワー概念をアメリカ国際理論研究に根づかせる上で果たした、次のようなスプラウトの先駆的な役割について注目するに至った。

すなわち、スプラウトは、(1)戦間期から第二次世界大戦中にかけての時期において、スパイクマン(Nicholas J. Spykman)、ウォルファーズ(Arnold Wolfers)あるいはシュトラウス・ヒューペ(Robert Strausz-Hupé)などに代表される大陸ヨーロッパからの移住・亡命研究者との知的交流を通じて、大陸ヨーロッパのパワー論に直接的に接触することによって、自らのパワー論の模索を開始し、(2)さらに戦後における、いわゆる「モーゲンソーとの対話」における自己確認の過程などを通じてこの概念をプラグマティックなアメリカ的価値観のフィルターを通して受容し、(3)1950年代から60年代にかけて、「定量化しうる集合体」(quantifiable mass)と従来みなされていたパワー概念を、アクター間の相互作用(interaction)に注目し「行動関係」(behavioral relationship)とみなすことによって再解釈を試み<sup>2)</sup>、その学問的成果に基づいて「対外政策研究」という研究分野の成立に向けて邁進したことである。

それは、いわば「パワー・アプローチによる対外政策研究の先駆者」という筆者のスプラウト・イメージであるが、残念ながら、そのような観点からスプラウトの試みを明示的に再検討するまでには至らなかった。

そこで、スプラウトにおける対外政策研究の再検討を試みる最初の作業となる本稿では、紙幅の制約もあり、スプラウトにおける国際政治学(以下、スプラウト国際政治学として言及)の理論体系の大枠を浮き彫りにすることを重点に置き、(1)スプラウトが現実主義者の立場から、いかに従来のアプローチの方法論的限界を認識し、それを乗り越えるためにパワー概念の再解釈へと至ったのかについての一連の思考過程の考察、(2)パワー概念の再解釈がいかに有機的に対外政策研究の分析枠組みに適用されるのかについての考察、(3)スプラウトによる対外政策研究が果たした時代的役割と意義ならびにその後世に与えた影響についての考察がなされる、筆者の次稿以降の論考につなげることを念頭に議論を進めていきたい。

スプラウト国際政治学の理論体系については後に考察するが、まずはじめに、その骨子について簡潔に言及しておきたい。スプラウト国際政治学の骨子は、おおむね次の5点にまとめられる。

- (1)スプラウトは、世界国家創設に代表されるユートピア社会の一足飛びな到来に疑念を抱き「現実社会の不完全性を受け入れることは敗北主義でも絶望でもない」との

- 立場から、国際政治を「利益ないし目的の衝突を調整し解決するための効果的なパワーおよび影響力の発動を伴う紛争の様相を呈するもの」として捉える。
- (2)スプラウトにおいて、国際政治の諸パターンは「ナショナルなコミュニティー間のパワーないし影響力の配分の過程という相互作用のイメージ」によって規定される。
- (3)現実の冷静なる分析の必要性を強調したスプラウトの最大の問題関心は、「諸国家間のパワー分布において現実に生じている根底的な変動をいかに理解するか」ということである。スプラウトはこのような問題関心から「パワーの性質と役割」について探究する必要性を説いた。
- (4)「人間は、国民国家をも含んだあらゆる社会システムにおける根源的なアクターである」との前提は、スプラウト国際政治学の出発点である。このような前提から、スプラウトは「国家の名において行為する人々」に注目し、政策決定者の行為・行動を分析の根幹に据える国際政治学の構築を試みた。スプラウトにとって、国家の行動を研究する際の重要な方法は「国家の政策を作成する指導者の行為・行動・認知を研究する」ことであった。
- (5)スプラウトは、その方法論として、自らが「人間諸科学」(human disciplines)と総称するところの地理学、社会学、心理学といった隣接諸科学の研究成果を、国際政治現象の記述・説明・予測の必要性から政治学の領域へと収斂させ、政治行動(政治的決定とその遂行)を考察するために「アクターと環境的諸要因との相互作用」に着目する枠組みを提示し、「エコロジカル・パラダイム」なる国家の対外政策行動の分析枠組みを提唱した。

このような国際政治学を展開したスプラウトは、(1)ラズウェル(Harold D.Lasswell)、あるいは前述したスパイクマンなどとともに「1930年代の国際関係研究に革命をもたらした一人」(ローズノウ・デーヴィス・イースト)<sup>3)</sup>、(2)「あたかも政治学研究の新たな理論的アプローチ」として「驚きをもって学界に受け入れられた野心的な試み」(ノア)<sup>4)</sup>、(3)「アメリカ国際理論研究における傑出した牽引者であり、なおかつ永遠なる斯学の開拓者であった」(ギルピン)<sup>5)</sup>、(4)さらには「アメリカにおける『国家安全保障の再発見』に寄与し、そこに研究上の焦点を当てた」というスプラウトの先見性を高く評価したフォックスの指摘<sup>6)</sup>などに見られるように、極めて大きな評価を受けている。

しかしながら、そのような大きな学問的影響力があつたにもかかわらず、スプラウトと親交があつた研究者や弟子たちを除いては、欧米および日本の学界において注目されることが少ない「忘れられた研究者」であることもまた事実である。

実際、国際政治学の文献においてスプラウトが引用される場合でも、その理論体系が本格的に紹介されることは極めて稀であり、断片的な紹介がほとんどである。筆者が確認した範囲内でも、日本におけるスプラウト国際政治学の体系的な紹介は皆無に等しく<sup>7)</sup>、欧米においては、1968年版の『国際社会科学百科事典』にデーヴィスが執筆した“Sprout,

Harold and Margaret"の項目<sup>8)</sup>、1972年に出版されたローズノウ・デーヴィス・イースト共編による『スプラウト記念論文集』編者序文<sup>9)</sup>、さらには1983年の*International Studies Quarterly* 誌の特集「シンポジウム—スプラウト夫妻を讃えて—」<sup>10)</sup>など、現時点で確認しているだけでも数えるほどである。

その理由として考えられることは、スプラウトの問題関心がいわゆる学問的方法論という理論研究分野にあったこと、さらには後述するように、その「学際的アプローチ」から、国際政治プロパーとしてみなされないこともあったのではないかと筆者は推測している。

したがって、スプラウト国際政治学の体系的な考察は、(1)このような国際政治学における理論研究の間隙を埋める作業という意味でも、(2)「パワー・アプローチによる対外政策研究の先駆者」としてのスプラウトの一連の試みを再検討するという意味でも、(3)また筆者によるアメリカ国際理論研究における「パワー論の系譜」を作成する作業を前進させるという意味でも、(4)そして何よりも、最近の筆者の大きな問題関心となっているパワー概念の「アメリカ的受容」の考察を、スプラウトという「当時のアメリカ人研究者としては極めて特異的な存在といえる」研究者を通じて試みるという意味でも<sup>11)</sup>、それぞれ有益な作業であると思われる。

## 1. スプラウト国際政治学の思想的背景

### (1)人間観

スプラウト国際政治学はいかなる思想的背景を基盤として成立するものなのであろうか。ここでは、その思想的背景について考察を進めていきたい。

まず、その人間観についてである。「人間は、国民国家をも含んだあらゆる社会システムにおける根源的なアクターである」という基本認識が、スプラウト国際政治学の出発点である。このような認識が、人間の営為を分析する理論的枠組みの構築へとつながるのである。実際、後述するように、スプラウトによる対外政策研究の分析枠組みにおいても、「アクターとしての人間の行動分析」が議論の中心を占め、スプラウトは「国家の名において行為する人々(=政策決定者)」に焦点を当てる必要性を説いている<sup>12)</sup>。

スプラウトがこのように分析的困難性を内包する「人間」にあえて焦点を当てるのは、次のような理由による。「人間行動の分析・評価は、一般に極めて難しい作業であるが、こうした試みがなされなければならないのは、これらのやっかいな実体を伴わない人間的要素(human intangibles)が、国力あるいはその弱さの最も重要な基盤のうちのひとつであるからである」<sup>13)</sup>。このように人間行動の分析・評価の困難性を認識しつつそれを分析枠組みの中に取り込もうと試みたところに、スプラウトの学問的信念が伺える。

### (2)国家観

スプラウトにとって、国家とは「分析的な意味において抽象的な概念」であり、「国家の行動」は、前述したように、「国家の名において行為する人々の行動」とみなされる。

もっとも、スプラウトは、国家を分析的には抽象的な概念であるとしながらも、「国際法的な観点からすれば国家は平等であるが、交渉力、駆け引き能力、圧力、抵抗力さらには国際社会における指導力を同じくする国家の組み合わせはひとつとして存在しない」という記述からも明らかなように<sup>14)</sup>、現実世界における国家の差異を歴然たるものとして認めており、すべての理論的思考を「人間的要素」に還元しているわけではない。

### (3)政治観

政治を「可能性を模索するアート」とみなすスプラウトは<sup>15)</sup>、政治行為を「目的追求的行為」として捉えている<sup>16)</sup>。そして政治学におけるパワー概念の重要性を認識した上で「国内外を問わず、政治的な相互作用を記述するのはパワー概念である」として、政治学を「社会におけるパワーの研究」と規定している<sup>17)</sup>。

### (4)国際政治観

スプラウトは、世界国家創設に代表されるユートピア社会の一足飛びな到来に疑念を抱き、「現実社会の不完全性を受け入れることは敗北主義でも絶望でもない」との立場から、国際社会を「究極的な力(force)を有する国家による力の乱用の危険が絶えず存在している社会」として捉えている。そして「不平等で、絶えずその強さが変化する主権国家間においては、均衡(equilibrium)、つまり勢力均衡による相対的安定は望みえず<sup>18)</sup>、国際政治を「強国間による情け容赦のない権力闘争」とみなしている<sup>19)</sup>。

その理由としてスプラウトは、「多国家システム」(multi-state system)下の国家間関係では「超国家的な世界政府なるもの」が存在せず、「自国の武力と説得によって支持される国家の目的と政策とが国際政治の諸パターンを定めざるをえない」からであると述べている<sup>20)</sup>。

スプラウトは、このような国際政治観から、国際政治を「利益ないし目的の衝突を調整し解決するための効果的なパワーおよび影響力の発動を伴う紛争の様相を呈するもの」と、あえて限定的に解釈している。スプラウトは、「国際政治」を「基本的には対立的なもの」と悲観的に見ている。もちろんスプラウト自身も、こうした解釈が極めて狭義であることを十分に自覚しており、次のように述べている。

「国際政治は、敵対的な目的に起因する紛争を解決ないし調整するだけでなく、共通の目的を達成するための協力的な行動までも含んだ上で定義すべきであろうが、こうした見方に対して我々は簡潔に次のように答えるだけである。国家間関係の文脈において、協力的な行動は、しばしば正反対の目的を隠すためであったり、また国家間関係において、概してゼロサム・ゲームでない場合は、やはり友愛的要素だけでなく紛争的な要素も顕在化している。さらに我々が強調したいのは、紛争という考え方は、単に法的あるいは心理的な意味においての敵対を意味するだけではないということである」<sup>21)</sup>。

このような議論から十分に推測できるように、スプラウトは、「協調」的状況の中での「対立」的側面にも注目することによって、「協調-対立」状況には様々な側面とスペクトルが交錯することを指摘しているのである。

## 2. スプラウト国際政治学の方法論的模索

### (1)分析志向的アプローチ

スプラウトの学問的関心の出発点は、2度の世界大戦によって「多国家システム」の構造が大きく変化したことであった。つまり、「独立を失う国もあれば逆に強大化する国もあった」という現実認識から、スプラウトの学問的な探究心は「世界政治において変化するパワーの諸パターンの究明」に向けられたのである<sup>22)</sup>。

「国家安全保障上の要請にかなう平和戦略の枠組みづくり」を目指したスプラウトは、「現実の世界情勢とその主要な動向に関する明確かつ現実的見方を獲得することが先決である」と説き、「より永続的な世界秩序を多国家システム内で再構築する問題」についての議論は「多国家システムの諸要素とその実際の作用に関する明確な理解に基づくべきである」と主張した。スプラウトは、ここで、現実の冷静なる分析の重要性を強調したのである。その成否は「諸国家間のパワー分布において現実に生じている根底的な変動をいかに理解するか」にかかっており、その第一歩として「パワーの性質と役割」について探究する必要性を説いたのである<sup>23)</sup>。

このようなスプラウトの問題関心を、あえて一言で特徴づけるとすれば、それは「強い分析志向性」であるといえる。スプラウトは、「国際政治学の主題については、かなりの了解がなされている一方で、その基本的な方法論に関しては、それほど合意がなされていない」としながらも<sup>24)</sup>、1949年という早い時期に、自らの国際政治学の方法論的模索として、次の8項目からなる「国際政治学の範囲と構造に関する概略」を世に問うている。

- (1) 対外政策の目的：各国の対外政策の目的ないし目標とは何か？そのいかなる一般化が可能であるか？
- (2) 政治家の動機：なぜ国家は、特定の対外政策を追求するのであるか？特定の状況において、政治家の行動を形成する動機や他の誘因となる影響力は何であるか？
- (3) ステートクラフトの手段とテクニック：政治家は、いかなる手段をもって、他国に対して自らが希求する目的の達成を試みるか？その比較のためにいかなる一般化された範疇が考えられるか？
- (4) 国家のケイパビリティ：政治家の努力が報われたり、報われなかったりするのにはなぜか？ある状況や関係において、国家の相対的なケイパビリティの評価ならびにその比較のために、いかなる範疇・原則の定式化が可能であるか？
- (5) 国家間関係：対外政策の達成のために諸国が行なう、同時に存在しなかつしばしは相容れない諸努力の中から、いかなる関係が生起するであろうか？
- (6) 調整メカニズム：国際社会のみならず、現代の都市化・産業化された文明の基盤をも破壊しなねない行動を国家にさせないために、国家目的を調整する上でのいかなるメカニズムと手続きがあるか？

(7)調整メカニズムの有効性：現状を維持するため、あるいは崩壊をもたらす暴力なしに必要な変化を達成するために、現存する調整のメカニズムとその手続きが、どの程度有効であるか？

(8)調整メカニズムの改革：現存する調整のメカニズムとその方法を、どの程度、改善強化することができるか、あるいは、より新しく効率的なものを設立・発展させることができるか？また具体的な改革のための提案を評価するために、いかなる判断基準が考案されうるか？<sup>25)</sup>

この自らが提起した「国際政治学の範囲と構造に関する概略」をめぐって、スプラウト自身はこれを「試案的で、かつ誤りを免れない考え方である」としているが、すでにこの早い段階において、スプラウトが後に完成させる国家の対外政策行動をめぐる分析枠組みである「エコロジカル・パラダイム」の萌芽を認めることができる。

### (2)学際的アプローチ

スプラウトの一連の著作には、いずれも学際的視座が強く打ち出されている。これは、ひとり人間、ひとつの学問領域だけでは満足のゆく解答は得られず、国際問題の研究は、多くの学問・知識分野からの大いなる貢献を必要とするというスプラウトの認識によるものである<sup>26)</sup>。スプラウト国際政治学は、地理学・社会学・心理学などの隣接諸科学の研究成果を、国際政治現象の記述・説明・予測のために政治学の領域へと収斂させた点に特徴がある。

このような学際的視座の中でも、とりわけ、政治行動を説明する上での地理的要因の重視は、スプラウトの国際政治学の特徴である。それは「地球的諸要因(earth facts)が国際政治の基盤を構成している」ことから、「すべての人間行動ではないが、たいてい人間行動は、人的・非人的な資源の不均等な分布と不規則な配置によって影響を受ける」というスプラウトの指摘に端的に示されているといえる。これは、地理学的な知識なしには「諸国家の興亡、政治的諸関係の全地球的なパターン、および人類が度々地球上で繰り返してきた安定的な政治的秩序の構築に向けた諸努力に関する現実的な理解は、到底不可能である」という理由によるものである<sup>27)</sup>。

### (3)「決定論的思考」批判

もともと、地理学的思考の国際政治学への貢献を高く評価したスプラウトも、地理的要因のみが人類の政治史を説明し、その政治的未来をも予測しうるとは考えていない<sup>28)</sup>。

スプラウトは、政治行動を説明する際の地理的要因の重要性を一貫して支持していたが、地政学的な認識論の一部に存在する一面的かつ決定論的な議論を拒否した。このような学問傾向は、あらゆるシステム・モデルに内在し、何も地政学の議論のみに限定されるものではないとした上で、スプラウトは、地政学的決定論を次のように批判した。

スプラウトによれば、マハン(Alfred T.Mahan)やマッキンダー(Halford J.Mackinder)などに見られる地政学的決定論は、「地理的要因が国家の対外行動を規定し、国家の将来の

行動をも予測できる」とする思考方法であり、そのような思考法は「軍事技術の刷新と準軍事的・非軍事的な政治的相互作用の結果によって、すでに妥当性を持ちえず時代遅れ」とされたのである<sup>29)</sup>。

このように、従来の学問的方法論の限界をめぐるスプラウトの批判の矛先は、「原因と結果の不変的な相関関係を仮定する」決定論的思考に向けられたのである<sup>30)</sup>。

#### (4)「中範囲理論」の模索

スプラウトの次なる方法論的模索は、こうした決定論的弊害を自らのアプローチから排除することであった。スプラウトは「分析レベルを比較的低い抽象化レベルに設定することによって「中範囲理論」(middle-range theory)の構築を目指した<sup>31)</sup>。それは、モデル化の過程における事実の単純化・一般化に不可避免的に付随する「事実の歪曲」を極力避けるためであると説明される<sup>32)</sup>。その試みは、従来のシステム・モデル(具体的には、スナイダー・モデルを指す)において省かれがちであった人間の営為、とりわけその心理的な側面をも分析枠組みの中に取り込もうとするものであった。

本来、システム・モデルとは、一般化・抽象化を志向するものであるが、スプラウトの場合は、そのシステム・モデルに、あえて意図的に一般化・抽象化とは相容れない媒介変数が入り込む余地を残すことによって<sup>33)</sup>、一般理論を目指すのではなく、「中範囲理論」の構築を模索した点に特徴があった。スプラウトは、このような禁欲的な抽象化によって「決定論」の弊害を却けたといえることができる。

スプラウトは、この「分析レベルを比較的低い抽象化レベルに設定する」工夫をほどこした「中範囲理論」構築の過程で、次の3つのアプローチを採用した。その3つとは「認知行動論」(cognitive behaviorism)、「可能論」(possibilism)、「蓋然論」(probablism)である。

まず「認知行動論」とは、「人は意識的に認知を通じて環境に対して反応する」と仮定する考え方である<sup>34)</sup>。この考え方に立脚すると、「政治的諸決定は、政治家の環境の認知、つまり『心理的環境』(psychological milieu)に基づいており、かかる諸決定の結果は、『現実に存在している環境』(operational milieu)によって影響を受ける」。しかも、その影響は決定論的ではなく、「人間と環境との間の相互作用として、たとえそれが政治家によって認知されなくても影響を受ける」とされる<sup>35)</sup>。

次に「可能論」とは、「環境は、機会とある程度の制約を人間活動に提供するが、最終的に決定を下すのは人間である」という思考方法である。つまり、この場合「環境の中に置かれている人間が決定を行ない、ある選択された目的に向かって行為しない限り、環境は潜在的なままである」。スプラウトによれば、この「可能論」は「決定論とは正反対な考え方」とされるとされる<sup>36)</sup>。

また「蓋然論」では、「アクターの常識的な判断」を前提とし<sup>37)</sup>、「蓋然的な調和の原則から、諸選択と諸決定が考察される」<sup>38)</sup>。この考え方は「可能論が主に現実に作用している問題を取り扱い、アクターの心理的世界における行動と環境との関係についての推論を



提供しない」ことを補完するものである<sup>39)</sup>。

このように、「分析レベルを比較的低い抽象化レベルに設定する」ことによって得られる成果を、スプラウトは、「パースペクティブ」以上「理論」未満としての「パラダイム」の獲得と述べている<sup>40)</sup>。この「パラダイム」というアイデアこそ、次章で取り上げるスプラウト国際政治学の中核をなす思考枠組みである。

### 3. スプラウト国際政治学の理論的枠組み

#### (1) 「エコロジカル・パースペクティブ」

前章で考察してきたように、スプラウトの方法論的模索は、政策提言的であると同時に分析志向的な色彩を強く出している。それは、単に政策論にとどまらず、米ソ冷戦の激化という政治的激情の影響をも却け、以下に述べるように、国際システムにおける国家の対外政策行動の分析枠組みの構築と分析概念の精緻化へと邁進する。

スプラウトがいうところの「エコロジカル・パースペクティブ」とは、国際政治全体の分析枠組みを提示・提供しようとする極めて包括的な試みを指す。したがって、「エコロジー」という用語は、一般的な使用法とは厳格に区別して用いられている<sup>41)</sup>。本来、エコロジーとは、ある特定の地域に住む生物群集と、その生活に影響を与える有機的もしくは無機的な環境との連関を総合的に研究する学問（生態学）である。

スプラウトは、生態学者によって展開された諸概念および諸原則の思考枠組みが、国際政治研究にとっても妥当性を持ち極めて有意的であるとの判断から、地球全体をひとつの生態系とみなすことにより、このような生態学のアイデアを国際政治の文脈に適用しようと試みたのである。

スプラウトによれば、この「エコロジカル・パースペクティブ」は、「個々人および政治共同体の相互関係、もしくはそれらと非人間的な条件・事象との相互関係」に焦点を当てるものと規定される。その基本型は、次の3要素から構成される。

- (1) 単位としての「アクター」
- (2) そのアクターを取り巻く「環境」
- (3) 「アクター」と「環境」との相互関係

このスプラウトの「エコロジカル・パースペクティブ」は、国家アクターのみならず他の様々なアクターから構成される国際社会において、「アクターは、人的要素のみならず非人的要素の影響も受け、しかも条件づけられた環境の中で機能している」という前提のもとで、国家の対外政策行動を究明しようとする分析枠組みの構築や分析概念の精緻化を模索する試みである<sup>42)</sup>。この「エコロジカル・パースペクティブ」によって、スプラウトは、行動科学的手法を国際政治研究に取り入れる端緒を開いたといえる。

#### (2) 「エコロジカル・パラダイム」

これまで述べてきた「エコロジカル・パースペクティブ」は、国際政治学における新た

な分析的視座の創出の必要性を表明するものであった。その要請に基づく体系的な分析枠組みの提示は、この「エコロジカル・パラダイム」によってなされる。

「エコロジカル・パラダイム」とは、「国際政治における相互作用の諸パターンを記述・説明・予測する」ための分析枠組みである<sup>43)</sup>。もっとも、この「エコロジカル・パラダイム」は、あくまでも「理念的な枠組み」を示すものであり<sup>44)</sup>、「エコロジカル・パラダイム」の具体的な議論は、後述するように、「対外政策分析」(foreign policy analysis)と「ケイパビリティ分析」(capability analysis)の範疇においてなされる。

スプラウトは、この「対外政策分析」と「ケイパビリティ分析」を、医者による患者の診察を例に、次のように簡潔に説明している。

「医者は、患者から自覚症状を聴き、患者が自分の病状をいかに認識しているのかを把握することによって、その病気が何であるのかを判断しようとする。さらに医者は、診察室の中で患者に様々な検査をほどこすことによって、患者の叙述によって得られた推論を確かめ、必要ならば、診断の修正をおこなう」<sup>45)</sup>。つまり、前者の「患者の叙述によって得られた推論」が「対外政策分析」にあたり、後者の「診察室の中で患者に様々な検査をほどこすこと」による検証が「ケイパビリティ分析」にあたる。

これを国際政治の文脈で説明するならば、「対外政策分析」では、政策決定者が「いかに環境的諸要因を認知し、政策の決定に至ったのか」が問題とされ、政策決定者が自ら認知した「環境」(心理的環境)に内在する「機会」と「制約」をいかに考慮し「決定」に至ったのかについて、政策決定者の視点から推論される。

また、後者の「ケイパビリティ分析」では、「環境的諸要因が、一国の対外政策行動にいかなる影響を及ぼすか」が問題とされ、「決定後の結果」(必要があれば「決定」に至るまでの段階)が、分析者の視点から考察される。このケイパビリティ分析では、対外政策分析によって得られた推論を、より確かなものにするために、分析者が、政策決定者の視点から離れ、第三者の立場から、実際の「環境」(現実に存在している環境)に内在し「決定後の結果」に及ぼす「機会」や「制約」といった環境的諸要因とアクターとの相互作用についての検討がなされる<sup>46)</sup>。

### (3) 「対外政策分析」と「ケイパビリティ分析」

このように「エコロジカル・パラダイム」に基づく議論は、「対外政策分析」と「ケイパビリティ分析」の範疇において展開されるが、その具体的な分析過程(推論過程)は、以下に述べるように、アクター間の相互作用を説明・予測するパラダイムとしての役割をになった「認知行動論」「可能論」「蓋然論」のコンビネーションによって規定される。

まず、政策決定者の「心理的行動」を説明・予測する「対外政策分析」の推論は、次のような手順で展開される<sup>47)</sup>。

- (1) 「対外政策分析」では、「人間は自らの経験・必要性・願望に照らして、環境に対して意識的に反応する」という認知行動論の立場から、「政治的決定とその後の行

動パターンとスタイルは、政策決定者の認知に基づいてなされる」と仮定される。ここでは、「現実存在している環境」がどうであるかよりも、政策決定者の「心理的環境」が問題とされる。

(2)「対外政策分析」において、政策決定は「合理性と論理性の観点」からなされる「熟慮の過程」として描かれる。政策決定者は「自らが設計した目的に向かって常識的・合理的見地から政策決定に至るもの」として仮定され、政策決定者の「常識的判断」が前提とされる(常識モデル)。また彼らの「選択と決定」は「『蓋然論』的な調和の原則」から推論される。

(3)分析者は、政策決定者の発言や行動などから、政策決定者のイメージ、つまり「心理的環境」を間接的に記述し、その状況や方向性を推論する。

他方、この「対外政策分析」による推論を、より確かなものにするために行なう「ケイパビリティ分析」は、次のような手順で展開される<sup>49)</sup>。

(1)「ケイパビリティ分析」の目的は、「歴史的な事例」もしくは「将来起こりうる事柄」の説明・予測である。「ケイパビリティ分析」では、特定の歴史的事実や将来における「決定後の結果」が説明・予測される。

(2)歴史的な事例では「当該国家によって実際に行使された影響力が、いかにして行使されたのか」が説明・予測され、将来起こりうる事柄では「仮定した特定の条件において、国家が行使しうる影響力、あるいは当該国家が果たしうる国際的役割」などが前もって評価される。

(3)環境的諸要因は、たとえそれが政策決定者によって認知されなくとも、「決定後の結果」に影響を及ぼすことから、ここでは、政策決定者の「心理的環境」よりも、当該国家の周囲を潜在的・暗黙的に取り巻く「現実存在している環境」における「機会」と「制約」の査定が問題となる。

(4)「ケイパビリティ分析」は、分析者によって「可能論」的に推論される「論理的仮定」(logical premises)であり、「Aのような諸条件が特定されれば、Bのようなことが多分起こるであろう」といった説明・予測がなされる。そこでは、いかなる環境的諸要因が妥当性を持ち、またそれが当該国家の目的や戦略にいかに関わるかについて、「『機会』と『制約』のマトリックス」の観点から、「可能論」的に推論がなされる。

(5)その「可能性の範囲の限界」を画定する国家のケイパビリティの評価は、たえず何らかの仮定の枠組み、つまり、政策の目的、遂行される戦略、当該国家の政治的諸関係などの「政策-条件の枠組み」(policy-contingency framework)の中で行なわれる。

(6)「ケイパビリティ分析」では、政策決定者の視座から離れた分析者独自の判断が要請され、その推論の結論は「ほとんどの場合、考慮される要因やそれぞれの要因

に付随する価値関係、さらには分析者によって異なる」ものとされる。なぜなら、「ケイパビリティ分析」は「本来的に完全なものではなく、観察された出来事からの一般化の過程で派生する想像力のなせる業である」からである。

スプラウトは、このように2つの異なる視座から、国家の対外政策行動を考察する分析枠組みを提示し、この「エコロジカル・パラダイム」に多次元的なシステムとしての意味を持たせることによって、いわゆる「ミクロ」と「マクロ」の視座の統合、さらには「過程」と「構造」の分析的統合を試みた先駆者であるといえる。

## おわりに

以上、本稿では、スプラウトにおける対外政策研究の再評価を試みる目的で、スプラウト国際政治学の理論体系の大枠を描き出すことを念頭に議論を進めてきた。筆者は、次稿以降の論考において、スプラウトが試みたパワー・アプローチによる対外政策研究の具体的な内容とその意義について検討を進めていく予定である。

## 注

- 1) 例えば、ドイッチュは、パワー概念を「政治の中心でもなければ本質でもないもの」として、政治学における「二次性」を指摘した上で、パワー概念に「政治的貨幣」としての意味を持たせ、サイバネティクスの枠組みの中で、ひとつの変数として取り扱っている(Karl W.Deutsch, *The Nerves of Government: Models of Political Communication and Control*, New York: Free Press, 1963, p.124.)。

また、アメリカ国際理論研究におけるパワー論の登場についての考察は、例えば、以下の論考を参照されたい。拙稿「アメリカ国際理論研究におけるパワー論の登場(1)－1930年以前－」『早稲田政治公法研究』第46号、1994年、31-52頁；「アメリカ国際理論研究におけるパワー論の登場(2)－1930年代－」『早稲田政治公法研究』第48号、1995年、29-56頁；「アメリカ国際理論研究におけるパワー論の登場(3)－1940年代前半－」『早稲田政治公法研究』第50号、1995年、33-62頁；「アメリカ国際理論研究におけるパワー論の登場(4)－パワー論の分類とその確認－」『早稲田政治公法研究』第53号、1996年、149-71頁；「アメリカ国際理論研究におけるパワー論の登場(5)－インプリケーション－」『早稲田政治公法研究』第55号、1997年、33-60頁；「パワー論の登場とその意義－戦間期アメリカ国際理論研究の再検討－」日本国際政治学会1997年度春季研究大会(1997年5月17日、筑波大学)部会IV報告論文、1997年、1-34頁。

- 2) Harold Sprout and Margaret Sprout, *Foundations of International Politics*, New York: D.Van Nostrand, 1962, pp.139-40.
- 3) James N.Rosenau, Vincent Davis and Maurice A.East, "The Editors Introduction," in J.N. Rosenau, V.Davis and M.A.East, eds., *The Analysis of International Politics: Essays in Honor of Harold and Margaret Sprout*, New York: The Free Press, 1972, pp.1-2.
- 4) Klaus Knorr, "Foreword," in Harold Sprout and Margaret Sprout, *The Ecological Perspective on Human Affairs: With Special Reference to International Politics*, New Jersey: Center of International

- Studies, Princeton University, 1965, pp. v -vii.
- 5) Robert Gilpin, *War and Change in World Politics*, Cambridge: Cambridge University Press, 1981, p. xiv.
  - 6) William T.R.Fox, "Interwar International Relations Research: The American Experience," *World Politics*, Vol.2, No.1, 1949, p.12.
  - 7) 日本におけるスプラウト国際政治学の数少ない引用例として、例えば、パワー論の文脈においては、大島英樹「モーゲンソウのナショナル・インタレスト理論の諸問題」『国際政治』第36号、1968年、105頁、122頁、高柳先男「国家の行動－目標と技術と力－」播里枝・浦野起央編『国際関係論講義』青林書院新社、1976年、116頁、また認知行動論の文脈においては、土山實男「認知構造と外交政策」有賀貞・宇野重昭・木戸蕪・山本吉宣・渡辺昭夫編『講座国際政治(2): 外交政策』東京大学出版会、1989年、68-9頁、が挙げられる。
  - 8) Vincent Davis, "Sprout, Harold and Margaret," in David L.Sills, ed., *International Encyclopedia of the Social Sciences*, Vol.18, New York: Macmillan and The Free Press, 1968, pp.732-6.
  - 9) J.N.Rosenau, V.Davis and M.A.East, *op.cit.*, 1972, pp.1-11.
  - 10) I.S.Q. Editors, "Symposium: A Tribute to Harold and Margaret Sprout (Editors' Introduction)," *International Studies Quarterly*, Vol.27, 1983, pp.241-2.
  - 11) 拙稿「国際理論研究におけるパワー概念の『アメリカ的受容』(1)－先行研究との対話－」『島根県立大学総合政策論叢』第1号、2001年3月(刊行予定)。
  - 12) H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1962, p.79.
  - 13) Harold Sprout and Margaret Sprout, eds., *Foundations of National Power: Readings on World Politics and American Security*, 2nd ed., New York: D.Van Nostrand, 1951, p.110.
  - 14) *Ibid.*, p.104.
  - 15) *Ibid.*, p.106.
  - 16) Harold Sprout and Margaret Sprout, *Toward a Politics of the Planet Earth*, New York: Van Nostrand Reinhold, 1971, p.109.
  - 17) H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1962, p.136.
  - 18) Harold Sprout and Margaret Sprout, eds., *Foundations of National Power: Readings on World Politics and American Security*, New York: D.Van Nostrand, and New Jersey: Princeton University Press, 1945, pp.4-5.
  - 19) H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1951, p.761.
  - 20) H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1945, pp.4-5.
  - 21) H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1965, pp.19-20.
  - 22) H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1951, p.761.
  - 23) H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1945, pp. v -vii, p.5, p.732.
  - 24) Harold Sprout, "In Defense of Diplomacy," *World Politics*, Vol.1, No.3, 1949, p.405.
  - 25) *Ibid.*, pp.405-6.
  - 26) H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1945, p.vii; H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1951, p.ix.
  - 27) H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1945, p.63; Harold Sprout and Margaret Sprout, *An Ecological Paradigm for the Study of International Politics*, New Jersey: Center of International Studies,

- Princeton University, 1968, p.21.
- 28) H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1945, p.63.
- 29) Harold Sprout and Margaret Sprout, "Environmental Factors in the Study of International Politics," *Journal of Conflict Resolution*, Vol.1, No.4, 1957, p.312; H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1962, pp.338-9.
- 30) H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1957, p.312.
- 31) H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1968, p.9.
- 32) *Ibid.*, p.4.
- 33) 本来的にシステム・モデルは一般化・抽象化を志向するものであるが、スプラウトがそのモデル化の過程で、あえて意図的に一般化・抽象化とは相容れない媒介変数が入り込む余地を残したことについて、スプラウト自身の言葉にしたがえば、これは「詩的許容」(poetic license)として説明される。「詩的許容」とは、創作的効果のため文法・形式などの破格が許容されることを一般的に意味する。
- 34) H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1965, p.140.
- 35) H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1968, p.34.
- 36) Harold Sprout and Margaret Sprout, *Man-Milieu Relationship Hypotheses in the Context of International Politics*, New Jersey: Center of International Studies, Princeton University, 1956, p.39; H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1965, p.33.
- 37) H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1957, p.320.
- 38) *Ibid.*, p.314.
- 39) H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1965, p.99.
- 40) H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1968, p.7.
- 41) *Ibid.*, p.8.
- 42) *Ibid.*, p.7.
- 43) *Ibid.*, pp.7-8, p.21, p.62.
- 44) *Ibid.*, p.43.
- 45) H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1957, p.325.
- 46) *Ibid.*, pp.318-27; H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1962, p.163; H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1965, p.11.
- 47) H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1957, pp.314-24; H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1962, p.163; H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1965, p.140.
- 48) H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1957, pp.310-26; H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1962, pp.165; H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1965, p.33; H.Sprout and M.Sprout, *op.cit.*, 1968, p.35, pp.63-4.

キーワード 国際政治 対外政策 権力 スプラウト 政策決定 international politics  
foreign policy power Sprout decision making

(Ichinen AKASAKA)